

「ああ、ばあちゃんの顔また小さなつとる。皺もこないが増えて。今度の休みの日、ゆつくりマッサージしてあげよ」顔のすぐ上で、孫のスマイレの声を聞いて、冷たい手がいとおしむように額の辺りを撫ではじめた。スマイレの手から何かが出ているのだろうか、と思うほど、その柔らかな感触は増幅して、カツはまるでその感触にすっぱり包まれていような心地好さを味わった。

カツの脳裏に、白磁でできているような綺麗なスマイレの手が鮮やかに浮かび、やがて、華奢な身体にそぐわないほどボリュームのある長い髪をポニーテールに結って、ゆで玉子に小さくて形のいい目鼻を書いたようなツルリとしたスマイレの

桜も見に行けなかつたんやから。行こうよ。バアちゃんも帰ってきたことやし、ツツジが見頃やんと、文恵を相手に喋っていた。

スマイレは信吾と文恵の末っ子で、隣の市で保育園の保育をしている。

スマイレが交通事故で母を亡くした園児の話をよくすると思っていたら、その子のお父さんが好きなの、とある日カツにそつと打ち明けたことがあった。

そんな男に嫁いだら苦労するだけや、と思っただが、恋愛だというやつはどう反応するか分かるらんなので、反対したらなまじ燃え上がるという例もあるので、

顔が浮かんだ。ああん、こないに痩せてしもうて、と言いながら、今度はしきりと身体を擦っているようだ。感覚は全然なかったが、まるで見ているようにはつきりとその情景がカツの頭に浮かんでいた。耳から入ってくる声や音で紛れもない現実だと思えるからか、頭に浮かぶ映像は想像の産物とは思えないほど鮮明だ。さっきの清の映像のように。ん？ そこまで考えて、カツは首を傾けた。(心の中でだが)スマイレの映像は事実裏打ちされて実際のだ。じゃ、清の映像は何ゆえああまで肉迫していたのだろうか……と。足元ではスマイレが細い声で、「今度の日曜日は皆で花見に行こう。バアちゃんが大変やったから

「ありや、子供が二人も居る人かいな。産む手間が省けたと思えんこともないけど、生さぬ仲の子育ては試練やで」と軽く言った。スマイレは暗い顔をしてしばらく考えていたと思ったら、数日後、

「あの人好きになるのもう止めた。今度は子供の居らん素敵な人やで」と言った。はや次のええ人見つけたんかいな、こんな清纯な顔をして当節の娘はどうなってるんや、と思てたら、「本屋さん、保育所に入入りしてる。よう会うんよ。けど、あつちは私のこと何とも思てないみたい。私はチラチラ見るんやけど、目が合ったことないから」二十二歳にもなって、スマイレはまだこんな恋をしているらしい。思い切るのが簡単はずだ。

すぐ上のアンジュは二十二歳のとき、中国人の青年とロサンゼルスに飛んで二人だけで結婚式を挙げ、そのままそこで暮らし始めた。二人は東京の同じ大学で学んでいて恋愛し、住むところはロサンゼルスと決めて卒業前に職を見つけていて、卒業するで行ったのだ。

「何て奴や。大人になったら何をすることも自分の勝手や思とんか。親を親とも思わんと。もうあいづは娘やない、家族やない！」と怒る信吾とアンジュの間に立って苦悩する文恵から、あーあツ、と深い溜め息をつきながらその話を聞いたとき、カツは、名前が悪いんや、そんな外人みたいな名前(漢字では杏樹やけど)つけるからや、と思

「いや、それでは語感が悪い」と信吾は言っただけだった。ミミでもタマでもわたしやええけど、死に物狂いで産んだ子供にそんな猫の子みたいな名前を付けられる文恵さんの心中は、と思っ顔を見ると、文恵は、「アツハツハ」と愉快そうに大口を開けて笑っているだけだった。

「付けられる子の身にもなってみたい」とカツは言いたかったが、はしやぐ二人に水を差すようで止めた。しかし、世の中はよくしているもので、ミ

つたものだ。因みに長女はミミ(深美)。猫かい、と思つたが、カツは強く文句は言わなかつた。三人に名前を付けたのは、信吾だ。信吾は文恵と結婚すると心の落ち着き場所ができたからか、気難しい表情が目に見えて晴れやかになり、陽気になった。

お産を終えた文恵の横で、赤い顔をして無心に眠っている赤ちゃんを信吾は嬉しそうに見て、「健やかに育つてよ。賢うなつてよ。奇麗になれえや」などと話しかけていたが、やがて、賢いだけの女というのも始末が悪いし、奇麗なだけというのものな。本当に美しい女、人間として美しい人になってほしい、と言っていたかと思うと、

ほんとうに心根が美しいのか、笑顔の絶えない陽気で素直な子に育ち、自分の名前を殊の外気に入っているようだ。

アンジュの場合だけはカツは居合わさなかつたのだが、凡その見当はつく。名字が大野だから、大きな野原に咲く一本の杏の大木でも思い浮かべたものだろう。そして、春には花で人々を慰め、初夏には果実で喜びを与え、暑い夏には木陰を作つて安らぎ与え、秋や冬には小さな昆虫や動物の住家となつて生命を守り育てる。そんな杏の大木のような娘になってほしい、とでも言ったものだろう。そして本当にアンジュは大胆で華やかな娘になつたのだが……。

スマイレの場合は、小作りの可愛い顔を見て、大きな野原に溶け込むように可憐に咲くスマイレの花のような子、というのはどうや。見る者の心を癒す。一面に咲いても一隅に咲いても可愛いかな。嬉しさを隠し切れないという照れ笑いの中に、一瞬、「ありや、また女か」という落胆の色を浮かべはしたが、浮かれた声で信吾はそう言った。

(四)

パタン、とドアの閉まる音が闇を振るわせて、車が走り去った。後にはまた、重い静寂だけが広がっていた。

って庭を横切って玄関に行かなければならない。庭の奥は、座敷の廊下の前になる。早い話が、この家は清が造った庭を囲むように、建てられているのだ。信吾と文恵は応接セットを運び出して板の間で眠っているのだろうか。そう思うと、ちよつと気の毒ではあった。

目を覚ますとまず、カツは瞼を開けようと試みた。全神経を集中させて渾身の力を振り絞って。とやっているつもりだが、思うだけで実際にはやれていないようにも思う。ともかく、開かない。開く気配もない。それじゃほんの少しのうめき声でも、と思ったが、それもやつぱりダメだ

「朝の四時やな」耳に馴染んだその音を聞いて、カツはそう思った。車は隣家に青汁を配つてきたのだ。音の聞こえ方がいつもとまったく同じなので、自分の部屋のいつものベッドに寝ている確信が持てた。ちよつと心が落ち着いた。文恵と信吾が隣の部屋で寝るといっているので、母家の八畳の座敷か六畳に寝かされていると思ったのだが……。

カツの部屋は東の棟の端にあつた。門を入つてすぐの所だ。横は襖で仕切つて応接間になっている。カツの部屋と応接間の前には一間の廊下があつて、母家に続いている。廊下の前には清が作った庭がある。門を入ると、カツの部屋の前を通

つた。どこも、全く動かない。「あーああ」と意識の中で少しだけ落胆の溜め息をついた。しかし、元気だつた頃のように、「つまらんこつちや、何とかせな！」というほどの気にはならない。痛くも苦しくもないからか、心の中で、何故か当然のように受け入れている自分がいるのだ。

もう少しすると、新聞配達のおーとバイが来るだろう。そしてその後、青汁の来ない日は向かいの家に牛乳配達の軽トラが来る。青汁と牛乳は隔日の配達で、日曜日は両方とも来ない。

(以上9月16日放送分)